

# 歌人柿本人麿朝臣

林 良 碩

歌人柿本人麿朝臣に就て書くも、何も自分の研究した範圍のものにあらず。唯讀書のまゝに記すものなり。大和民族尊崇の的である人麿朝臣が、石見の土地で生誕し、終焉されたことは以て石見の誇りとし、嬉ぶ可である。予は石見の人なり、故に喜びつゝ石見物語りよりその一端を記すなり。

我が日の本の荒涼たる原野を言葉の花に粧ひなさんさ、卒然として落下したる人麿朝臣については、我國の歴史は記憶の外に置き、傳説は神祕の中に封じ籠めて仕舞つた。たゞ思想界の一單を傳ふるものは萬葉集あるのみである。

柿本氏は建國第五代孝昭天皇の皇子天足彥押人命あまもろひこのくにおしひのみことの後裔で、今の和國葛城郡新庄村大字柿本が正しい呱呱の生地であるに傳へ、一面には石見國美濃郡小野村戸田綾部家の柿の本に出現せられたことも稱せられて居る。で權威ある幾多史家の考證によれば、其の没時は四十五歳より四十九歳迄の壯齡とし、石見國在任中に没せられたことも主張するのである故、他に適確なる文献の現れない限り、千載に傳へ來つた石見が持つ美しい傳説を否認する事は出来ないものであると思ふ。

由來柿本家の系統の中には偉人傑士が多數現はれて居る。即ち推古期の遣隨使小野妹子があり、歌人としての山上憶良、更に小野篁、小野小町の名人名妃等が日本文化の春花に咲き争ふて居る。かゝる中に於て人麿朝臣の如き歌聖の生誕は偶然の故ではないであらう。

人麿朝臣が仕官の志を抱き京へ上つたのが、持統天皇の朱鳥之年であつた。其の性極めて聰敏であつた、殊に歌道に於て非凡の天才であるこゝを認められ、忽ち拔擢で東宮舍人に補せられたのである。

都へ上る途上近江の舊都を過ぎ其徒らに草茂く、霞緑なるを歌ひ、その卓絶さを示されたのである、左に其時の歌を示す。

玉だすき 畝火の山の 櫃原の ひじりの御世ゆ 生れまして 神の盡こころなき 樛つがひの木の いや繼々に 天の下 知ろしめしゝを 空に見つ 大和をおきて 青丹よし 奈良山を越えいかさまに おもほしめせが 天離る 鄙にはあれざいはばしる 近江の國の さゞ波の 大津の宮に 天の下 知ろしめしけん 天皇の 神のみここの大宮は こゝに聞けども 大殿は こゝにいへども 春草の しづく生ひたる 霞たち 春日の霧れる 百敷の 大宮ごころ 見ればかなしも、

## 反 歌

さゞ浪の志賀の辛崎さきゝあれぞ

大宮人の船まちなねつ

さゞなみのしがのおほだよむこも

昔の人に亦もあはめやも

かくして持統、文武の兩朝に歷仕し、其の間幾多の悲慘事を家庭の上に味つた朝臣は、悶々の情を多情多感なる悲歌に表現して僅かに其の寂寞を慰めて居たが、文武天皇、大寶元年に依羅娘よろのいらめ子を迎へて第三の妻とせられた。然して生涯を過ごされたのであります。惶急しい月日は流れて文武天皇慶雲二年には石見國に赴任するこゝになつて、國府の地に來られた。

朝臣は我建國の歴史に明かで忠君愛國の至情に富み、神をたゞへ天皇を崇めた上代の思想を代表した歌人である。萬葉、古今、拾遺、新古今、新勅選、續古今、其の他續後選等の集を通じて皇居を歌ひ、遊獵を歌ひ、別離に羈旅に、懷古に戀愛に何れも雄大簡勁なる調子、純化された感情もて、隠さず飾らず切實に發表してしかも藝術的技巧を極め、之を諷誦する時は純眞の氣がひし／＼と押し迫るを覺ゆるのである。

萬葉集第二期の代表的歌人である人麿朝臣は最も叙情に勝れ、皇國の歌聖として仰がれる所故であり、此以後輩出した奈良朝歌人は何れも朝臣の影響を受けない者はない、實に朝臣は我日本の和歌史上に濶歩した第一人者である事があるのである。

持統天皇七年の秋、人麿朝臣は初めて輕娘子かろのいづめと結婚せられたと、娘子は大和國高市郡輕郷に家居し、朝臣は飛鳥の都から通ふて居られた。

足たちねの 母が手離れ かくばかり

術なきこゝは 未だせなくに

是は娘子の歌で、其の切なる情を寄せたものだ、此の外に贈答の歌には

人 麿

眞熊野の 浦はまの濱木綿 百重なす

心は思へき 直に逢はぬかも

娘 子

愛はしやし誰が障れかも 玉鐸の

道見忘れて 君が來まさぬ

人 麿

暫くも 見ねば戀しき 吾妹子を

日にく來れば 言の繁けむ

等、思慕の情切なるものがある。

持統天皇八年九月、朝臣の新妻輕娘子は病に罹り俄に他界の人となつた、其の死去の知らせの使が來た時の驚き如何計であつたらう其の痛惜の情を述べた「長歌」の意を要譯すれば、

「輕の道は妹が家里だから、常に行つて住みたいのは山々であるが、新婚の當時餘り繁々行かば、人目にも立つて兎や角言ひ騒がれるこゝが恥しいので、末長く緩々逢はむと、心の中に戀しく思ふて月日を送つて居る間に、圖らずも妹が身まかつたといふ使が來たので言ふすべも爲すべも知らず哀れに悲しく、只音信のみ聞いては在るにも在られぬので、吾心の千が一も慰むる事もあらうと、輕の市に出て聞いても固より妹が聲も聞えず、行き交ふ人の中に一人さへ妹に似た人も見へぬので今は詮方なく妹が名を呼び叫び、袖を振つて心惑ひせらるゝよ」と、其の後に

### 反 歌

秋山の紅葉を茂み 迷はせる

妹をもこめむ 山路知らずも

紅葉の 散りぬるなべに 玉梓たまづきの

使を見れば 逢ひし日思はゆ

と、切なる心を其儘に赤裸々に歌はれて居る。其後朝臣は羽易はつひのいづめ娘子を娶り給ふた。翌年愛しき妹と海邊を逍遙し、即ち

飽浦濱に至りし時の歌に、

網引する 海士ミや見らむ 飽浦の

清き荒磯を 見に来し吾を。

吾妹子ミ 見つゝ愛ばむ 中つ藻の

花咲きたらば 我に告げこそ。

大妃貴少御神の 經營賜し

妹背の山は 見らるゝ好しも。

程なく朝臣は都に歸へられたが、其頃羽易娘は身重になり、翌年玉の如き一子を分娩した。然るに四年八月に至り如何なる病魔の魅入りしか、羽易娘は現身は常なき習ひにて、遂に愛兒を残し朝臣に先立つ身となつた。朝臣の悲しみ何に譬ふ可き、其の時「長歌」あれども、略して反歌のみに止めて置く

衾路を 引手の山に 妹を置て

山路を行けば 生けりこもなし。

家に來て 妻屋を見れば 玉床の

外に向ひけり 妹が木枕

こ、其年も嘆き暮し、翌大寶元年八月妻の一周忌にあたり、さゝやかなる月を見て、

去年見てし 秋の月夜は 照せれど

相見し妹は 彌淨さかる

此の年九太上天皇、文武天皇紀伊國に行幸あり、朝臣も從駕の中に加はり、光年羽易娘ミ共に遊んだ名所黒江、和

歌浦、飽浦なを過ぎ追憶の歌を詠じた、

古へに妹と相見し 野羽玉の

黒江瀉を 見れば不樂しも。

玉津島 磯の浦回の 眞砂にも

染ひて行がな・妹が觸りけむ。

紅葉の 死去にし子等と 携はり

遊びし磯際 見れば悲しも。

潮氣たつ 荒磯にはあれと 逝水の

過去にし妹が 形見とぞ來し

朝臣は何れの妻とも交情いと深く、中にも羽易の娘子とは、深い愛着を感じ一朝の死別を如何に嘆き悲しんだ事であらう。

巖すら 踏破るべき 大丈夫も

戀こいふ事 後悔にけり

を見ても其の痛恨思ひやられるのである。大寶元年十二月人麿朝臣は、三度目の妻として依羅娘子を娶られ、三四月にして筑紫の任に赴き、三年を彼地に送り都に歸へり、一年遑まなくして石見の椽に任ぜられ、多情多感なる朝臣が夜なく枕に通ふ浪の音に、都に残せし妻を偲び、如何に明け暮れ悶へられたことであらう。

心には 千々に思へと 人に言はず

吾が戀ふ妹を 見んよしもがな

是は石見から都の妻に送つた咏嘆である。

元明天皇和銅元年夏の頃朝臣は石見國で假初に通ふた娘子があつた。其の女の名は傳たはらない、秋九月頃朝臣は都へ上る時、此の娘子と別れを惜しんで長歌二首と短歌がある。第一の長歌は長くなるから其の意を略し止めて「反歌」のみを示す、

石見野や 高津の山の 木の際より

吾が振る袖を 妹見つらむが

小竹の葉は 深山もさやに 亂れども

吾は妹思ふ 別れ來ぬれば

第二の長歌は更に其戀々の情緒を歌ひ盡し多情多感な朝臣の一面が窺はれる。故にその要譯を示す。

「愛しい娘子を深く思ひ乍らも、相寢した夜は幾許もあらず、暫くの間に別れて來たので名殘惜しく心の苦痛さに堪え兼ねて、道の隈々毎に數々反り見るけれども、渡りの山の紅葉さへ散り亂れて、妹が振る袖も明らかに見え、妹が家のあたりのいよく遠ざかり隠れて、日も傾き物悲しき夕暮にさへなれば心細く、かねては心猛き大丈夫ぞと思ひ誇りて居た吾さへも、戀しき心の堪へ難く、袖の裏まで涙がぬれて通つた。」

### 反 歌

白駒の 足搔を速み 雲居にぞ

妹があたりを 過ぎて來にける

秋山に 散らふ紅葉 須臾も

勿散亂りて 妹があたり見む

朝臣は娘子に別れ、石見國を遠く離れて都の方に近づき播磨路にかゝり

天離る鄙の長路ながぢゆ從戀ひ來れば

明石の門より 大和地見ゆやまとこま

遠くありて 雲居に見ゆる 妻が家に

早く到らむ 歩め黒駒。

さて朝集使の用務も果て、石見の任所へ歸へらんとする時、妻の依羅娘子は

勿思ひ 君はいへきも 逢はむこき

何時ぞ知りてか 吾が戀ざらむ。

こ歌つて別れを惜しんだ、朝臣は遠からぬ中に都に上るであらうと、妻の心を慰ぐさめたものゝ、此一時が朝臣は遂ひに永世の別れとなつたのである。

時は和銅二年三月朝臣は死に臨んで左の自傷作歌を残した、

鴨山の 岩根し枕ける 吾をかも

知らずに妹が 待つゝあらむ

都にある依羅娘子は、それとも知らず春にもなれば舍人親王の御推舉によりて都に歸り來むこの、朝臣の別れの言を力に待ち暮らして居たであらう其の時に、石見國から使が來て朝臣の身の上をしらした。娘子の歌に

今日今日ぞ 吾が待つ君は 石川の

貝に交りて ありこ言はずや

こ驚きながらも、なほ使の言を信じかね



吾天子は 幸くいますこ かへり來て

吾れに告げこむ 人の來ぬかも

そして依羅娘子は漸く心を静め今は亡き跡を弔はんが爲に、遙々旅路に上つた。あらゆる日を重ねて、石見に來て見れば、景色妙なる鴨島も、流れ清けき石川も、只涙の種であつた。

直に逢はゞ 逢ひもかねてむ 石川に

雲立ち渡れ 見つゝ慕はむ。

こゝに歌の人、人麿朝臣は石見の地にてその生涯をお送られ、其遺骨は貞淑娘子によりて大和にもち歸へられたのである。

以上記したきこゝ多々あれど、妻等に對する歌を主として揚げ筆を止め置く、長歌は歌意の要領にて示した、本文の無きを悲しみつゝ。

——「石見物語り」より一端を——